

Mastery for Service

母校通信

2021
Spring
147号



[巻頭企画]

～リアルとバーチャルが両立する時代へ～

ニューノーマルの 暮らしと働き方を考える

[時のひと]

アメリカンフットボール部 FIGHTERS

大村和輝_{監督}



関西学院同窓会

ニューノーマルの暮らしと働き方を考える

～リアルとバーチャルが両立する時代へ～

2020年12月7日午後、各世代の3人の同意の方々に、コロナ禍の中での暮らしや働き方の変化、ポストコロナ社会に向けた考え方や生き方について、それぞれの立場から話し合っていました。



今までの常識が通用しないコロナ禍 大学はオンライン化へ

塚本 今回はポストコロナを見据えてお話ができればと思っています。私は、1968年の文学部ドイツ文学科を卒業しました。司会を務めるとともに、デジタルが苦手なアナログ世代を

代表してお話に参加させていただきま。まずは自己紹介を兼ねてそれぞれのお仕事へのコロナの影響をお聞かせください。

上村 関学の経済学部で教えています。専門は財政学で、国や地方自治体の資金の流れ、サービス、税制などの研究をしています。94年に経済学部を卒業し、大学院も関学です。大学を出て一年間、研究員をしていましたので、あわせると10年間お世話になりました。2000年から東洋大学で教え、2008年から現在のポストです。大学の学長補佐もやっている立場上、今後の教育や経営の在り方を

考えています。これから大学教育は大きく変わると思っていますので、そういう話もさせていただきたいと思っています。

片山 2012年に文学部フランス文学科を卒業しました。新卒で化粧品会社のクチコミサイトなどを運営しているIT系企業に就職しまして、マーケティングやメディア編集に携わりました。その後、2015年にスタートアップ企業に転職し、動画メディアで企画編集をしたり、広報として会社や事業をPRしてきました。2018年に起業し、昨年12月に電子ブックプラットフォーム「VOUTIQUE」を立ち上げ

運営しています。セルフで電子ブックを作るサービスで、個人編集をして発信ができます。

原田 高等部から関学で、2003年に経済学部を卒業しました。家業が和菓子子の販売ですので、パティシエとしてフランスへ3年間留学しました。その後は工場で様々な分野を経験し、今は経営に携わっています。390周年を迎え、昨年は節目として記念式典を予定しておりましたが、全てが中止になりました。ご進物の商売が中心ですので、冠婚葬祭や企業のパーティがなく、日々コロナの影響を肌で感じています。



上村敏之

1994(H6)年経済学部卒業。
2000年博士(経済学)取得。関西学院大学経済学部教授。学長補佐、財務省財政制度審議会臨時委員、内閣府民間資金等活用事業推進委員会委員。



原田誉之

2003(H15)年経済学部卒業。
関西学院大学評議員。次世代委員。1630(資本)7(年制)第2巻。千鳥屋宗家常務取締役。



片山詩帆美

2012(H24)年文学部卒業。
2018年(株)「VOUTIQUE」SNSプロデューサー。メディア出版事業。PR主催事業を創立。代表者。



塚本恵美子

1968(S40)年文学部卒業。
関西学院大学非常任理事。編集委員。経営者セミナー「アグル」の共催。代表。経営講師。

上村 大学への影響も大きかったですね。大学は閉じ、教育をどうするかという問題から一気にオンライン化しました。自粛期間の1か月でオンライン準備を行い、切り替わりました。それまでに学内にICTやインターネットのテクノロジーがあったので、すぐになくことができて良かったなと思います。一方で1年生は学校に来ることができずに人間関係を構築できない。改めて大学は学ぶための場所ではなく、先生と学生の関係性を構築するための場所だったことを感じました。



関西学院会館 藤の間に

上村 店舗で見てネットで買うというような流れになっていくでしょうね。

原田 ファッションビルを運営する企業の社長が、Amazon ができてから店頭で商品を確認して、購入はネットという現象が起きていることから、店舗はショーケース化するという話でした。その点、私たちの商売は食べないとわからないこともあって、来店につながらず、今はネットで香りを感ずる研究も進んでいて、味もネットで伝わるようになるかもしれませんね。

上村 パーチャルだけどリアルを体験できるという時代が来るでしょうね。大学教育もリアルキャンパスに来なくてもよくなり、パーチャルキャンパスにロボットやアバターを出席させて授業を受けるようなことも考えられます。

塚本 私たちの世代は頭ではわかっていても腑に落ちないことがあります。主人は、スマホも電話しかできなくて、70歳以上の世代はそういうところによく行って行った方がいいのでしょうかね。

上村 勉強していただくしかないですね。デジタルデバイス（情報格差）といわれる差はより広がっていくのでしようね。オンラインを利用する頻度が上がると問題はいろいろ出てきますが、それを越えるテクノロジーも出てくるので、オンラインとリアルの対立はなくなり、場所の制限がなくなり、働き方も変わっていくでしょうね。

業は対面とオンラインを組み合わせて行うと意外と楽なようですね。

上村 世間では、オンライン授業と対面授業の対立が語られています。本来はベストミックスが何かを探していくべきだと思っています。問題は大学が提供する時間割にもあって、対面授業の合間にオンライン授業が入るとオンラインができる場所がないという問題が出てきています。曜日分けするなどのこれからの対策が必要ですね。

オンラインが進み 価値の上がったリアル 「融合」が鍵

塚本 ご自身の働き方に変化はありましたか。

上村 私の仕事も激変しました。週に1度は東京出張をしていましたが、オンラインの会議になると研究室から会議に参加できるようになりました。移動時間が減った分、他の会議が入り、むしろ忙しくなっています。職種によっても違うでしょうが、東京に行かなくても仕事ができる時代であることを実感しています。

それでも、東京一極集中の解消は簡単ではないと思いますが。

東京の人間関係を 維持したまま 地方で生活する時代

塚本 大手企業が地方へ移転する時代です。コロナによってそういう将来が、一気に身近になるかもしれませんね。大手人材派遣会社の淡路島への移転は衝撃的でしたね。

片山 東京で働いていた私の友人も地方に移住しました。地方から東京の仕事をこなしています。一人が複数の仕事をできるようなった今、本業をしながら、地域に密着した仕事に携わることもできるのは魅力的だなと感じます。

上村 鳥取空港や徳島空港の周辺はICTの企業が集まっているようです。海があり、食べ物も美味しい、でも1時間で東京に帰れるということが大事です。六本木に必要はなくても、人間関係は大事で東京とはリアルでは繋がっていたい。

原田 確かに東京に住んだ経験があ

原田 季節の商品を扱う弊社では半年ごとに計画を立てるのですが、日に日にその予測も立てられなくなり、今は社内の体制が変わりまして、材料の会社にもバックアップをしていただきながら、2週間先でも変更できるような体制になりました。しかしながら、まだ根本的な製造計画は材料となる農作物にも直結していて混乱しています。とにかく社内が激変している状態です。

片山 うちの会社はITを活用し、情報をいかに皆さまに届けるかにフォーカスしたサービスをしています。業務委託のパートナーとして、広報/PR活動を支援したり、SNSを活用したマーケティング施策を企画しています。基本的にはデジタル上で展開していますので、コロナによる大きな影響はありませんでした。ただ、リアル店舗をもっとおられるクライアントからは、店舗で商品が売れないとの相談も増えており、客足が落ちた分どのような施策を行うべきか、よく話し合っています。

塚本 手に取ってこそ伝わる感覚ってありますものね。

片山 直接、消費者と接するイベントでプロモーションをしていたところは、その予算をライブ配信へと回しています。無料のSNSを活用したプロモーションは、インフルエンサーにお願いすることで5万人や10万人の方に届きます。

と、その繋がりは大事になります。東京にいと、企業のトップの方から気軽にお電話をいただいて、今日会えるかみたいな話になることもありました。新規事業の話などはその場で決まることもあり。東京にいと声はかかりますが、関西にいと気軽に呼んでもらえません。

上村 関学の卒業生もベンチャー企業の方は東京におられる方が多いですね。コロナによって教室の空きが出ていますので、キャンパスの中にオフィスを構えていただき、学生と交流していただけるといいですね。企業側もいい人材がゲットできるかもしれませんし。

片山 東京で驚いたのが、学生と企業の距離が近いことです。一年生の頃からインターンで会社に入って鍛え、社会に出た時に最初からビジネスの会話ができるのは、学生にとっては大きなことではないかと思えます。

上村 企業での経験ができて単位ももらえるような授業はありますが、実はそれ以外のところが大切で、構内にベンチャー企業に来てもらって学生とプロジェクトをやっていたり、重要な取り組みは面白いですが、重要ですね。ポストコロナで大きな教室は必要ではなくなり、きちんと改装して使ってもらえるようにしたいですね。

すので、雑誌などリアルなものに使っていた予算がデジタル上に流れてきています。

塚本 ご自身の働き方はあまり変わらない感じですか。

片山 今まで5、6割はZoom（Web会議のアプリ）や Slack（ビジネス用のチャットツール）でやり取りしていたのが、9、10割になったという状況です。工作上、大きく変化した感じはありませんが、リアルで会うことの価値が上がったように思います。

上村 両極端なお二人ですね。消費者に直接、物を売っている商売はしんどい状況でしょうね。

原田 自粛といわれると日本人は正直に反応します。私たちも通販をしていて、その売り上げだけを見ると160、170%の伸びはありますが、売り上げ全体から見ると少なく、やはり下がっているというのが現状です。

塚本 私たちの世代は触って商品を選びたいと思うのですが、若い世代は店舗を必要としないのでしょうか。

片山 若い世代もリアルな部分は必要だと思えます。リアル店舗を訪れて店の雰囲気を感じ、店員さんと会話することが全て体験として価値になり、デジタルではできない体験ができる場所として逆に新鮮になっていく感じはあります。むしろ店舗に行くのがより楽しみになります。





2020年4月のキャンパス風景

必要なのは デジタル化と 残すべき文化の ベストミックス

原田 私の友人が8年前に起業したのですが、ここ2年で飛躍し、出資も増えていると聞き、その勢いに驚きました。関学の卒業生でもベンチャー企業を立ちあげている人は東京を拠点にしている人がほとんどです。ベンチャー企業の人は集まって考えを出し合い、アイデアを広げる方も多いので、集まることができる場所があると喜ばれるのではないのでしょうか。

片山 私は文学部の卒業で、システム開発の知識がなく、システムの話をするために勉強が必要でした。人を雇う時のポイントは、文系でもシステムまわりの理系の方と話ができるということでしょうか。最低限の知識は持っていないと務まりません。

上村 大学でもAI活用人材というプログラムが一昨年からは始まり、今年の4月からはオンライン化されます。

上村 ベンチャーの起業家が集まって話題になるのはどのようなことですか。

片山 話題になるのは、資金と人材確保の難しさです。優秀なエンジニアは単価も高く、取り合いです。そういう方に来ていただくためには、いかに仕事に共感してもらって入社を決めてもらうかです。なかなか難しいです。

原田 中国企業で入社当初から1000万円の給料というところがありました。そうなる海外へと出ていく方もいらっしゃるようです。

価値の高いリアルと デジタルが両立する ポストコロナ社会

授業で様々なシステムを使うので学生たちのICTスキルは自然に上がっています。

片山 今は新しいシステムがたくさんあって、いかに使いこなせるかというスキルが社会では大切ですからね。

上村 しかも一年でそのシステムは陳腐化します。どんどん新しいシステムが無料で出てきますから。

片山 美容関連の方にお聞きすると、自分たちのスキルで勝負してきた世界ですが、SNSを活用して集客ができるかどうかで収入が変わる社会に変化しているようです。今後もそういう能力がもつと必要になるでしょう。

塚本 自分から発信していかないといい時代ですね。去年の常識は今年の常識ではなくなっているという時代ですね。

塚本 今日のお話を通してポストコロナはどうなると感じましたか。

片山 今日、皆さんとお話して、どちらか一つという発想ではなくて両方を持っていていいのだと感じました。デジタル、リアルの両面を持ち、場面に応じて使いこなせる判断力や準備をしておくことが大事だと感じました。

原田 うちにはリアルな店舗がメインで

文系のコミュニケーション能力を持ちながら、AIの知識を持つ人材を作らなければいけないと考えています。ぜひ、企業の方に来ていただきアウトプットできる場を用意してあげたいですね。

塚本 ITスキルを持ち、オンラインが当たり前になりつつありますが、この「母校通信」は、巻頭企画だけWEBで見ることができませんが、全体としてはWEB化していません。そのことについてどう思われますか。

原田 自動的に送られてくるWEB案内は、不思議とあまり読まないです。

塚本 WEBは自分で見ようとしなないと見ませんからね。「母校通信」は今のところ紙媒体の方が存在意義もあるんじゃないかと思えます。WEBだと見えないページは見ないですね。本や冊子だとバラバラでも読みますものね。

原田 電子書籍を利用した時期もありましたが、疲れて紙に戻りました。新聞もWEBタイプと新聞紙面をそのまま読める電子版がありますが、私はめくる感覚が好きで紙面タイプを読んでいます。

上村 古い世代です。紙がいいですね。読んだ本を置いておきたいというのがある。本を並べる楽しみがなくなくなるのは辛いですね。

片山 その時の気分に応じてどちらか選べると良いですね。本屋さんが好き

ですが、人と触れ合わない販売も学ばないといけないと感じました。とはいえ長年対面でやってきて、人間関係の礼儀やめくもりを大事にしてきましたし、これがなくなることはないと思います。だからこそ、私たちが大事にしてきたものをネットやITを駆使して活用していかなければいけないなという思いも出てきました。上の世代は新しいものに対して億劫になったり、下の世代は古いものを批判したりする心が芽生えやすいですが、それぞれを否定するのはなく支え合って良いところを合わせたサービスが必要だと感じています。

上村 オンラインになって良かったことをどう伸ばしていくかですね。同窓会もオンラインを利用できたらいいですね。今まで日本各地の同窓会支部

な人は、年代に関わらず多いと思えますし、本屋さんがなくなるのは困ります。知らない人の知らない本に思いがけず出会える楽しみが魅力です。

上村 デジタルが進むと図書館の在り方も変わるでしょうね。本の魅力は手に取る喜びという部分もありますからね。

片山 すぐ捨ててしまうようなカタログ的なものは電子化でシェアがしやすい、拡散性が高まるのでどんどん電子化したらいいと思っています。さつと読むのは電子、時間を忘れて読みたいときは紙ですね。

塚本 しばらくは混在する時代が続くでしょうが、この先、今のデジタルネイティブの子どもが大きくなるとわからないですね。私は絵本の読み聞かせしていますが、めくって次に行く感覚が嬉しいですね。

上村 リアル体験の価値は大切です。ベストミックスを探る時代が何年かは続くでしょうね。

原田 デジタル化が進んでもなくなっただけではないものはありますものね。本をめくる感覚とか。

上村 また一方で、会議資料はペーパーレス化が進んでいますし、子どもの教科書もそのうちなくなるでしょうね。ランドセルもいらなくなるかもしれないですね。大学でも禁止されていた携帯の充電が認められるようになり、社会的価値観も変わります。しかも、

の方とお会いしてきましたが、今後はオンラインも使いながらつながることでも考えていければと思います。今日の対談で企業と学生のつながりをもっと持ってもらいたいと強く感じました。リアルキャンパスを使った今後を考えたと思います。

塚本 今日は、色々な立場からの楽しい有意義なお話を伺うことができ、本当に有難うございました。

(あとがき)

色々な年代、経歴、立場の違う同窓生が集まっていたら、お話を伺いました。上村先生を中心に、このコロナ禍にあつて思うことや、コロナ後の世界についても話を進めて行きました。まだまだ、先行きも出口も見えず、閉塞感ばかり募るこの状況で、どう生きどんな未来を描けるのか？今も正解は見つけられていません。

でも、この一年もがいて来た分、私達にも色々な知識や知恵が少しずつ身につけてきたように思います。この座談会が、それぞれの分野で身に付けて来た知恵を共有しあう場となり、同窓の皆様にも一歩でも前に進むきっかけになればいいと思っています。

表紙のタンポポのように、どこかで春が生まれています。あと少し頑張りますよ！



コロナ禍での授業風景、創立が設けられた大学図書館と食堂